

島の「宝」をみんなでかたちにしていく

商品開発研修生の果たすべきこと

島根県中ノ島 後藤隆志

「商品開発研修生」（注）として、海

士町で暮らすようになって二度目の秋が終わりを告げようとしている。初心者マークがとれた頃だな、そう呟く島のおっちゃん。自然と出てくる島の言葉。宝探しを続ける日々。これまでの生活のなかで見つけたいろいろな宝物、そんな宝を磨ききれずに焦り出す日々。海士町には本当に多くの宝物がある。でも、どれもこれも一度に磨くことは難しい。宝を見つける作業から、宝を選択する段階、自分が出ることから少しずつ結果を出す段階へと来ている

ように感じている。

商品開発研修生に
たどり着くまで

運動会、学園祭、サークル活動……。幼少の頃より、皆で何かを成し遂げる、そんな瞬間が大好きだった。皆で喜びを共有出来ること、これほど幸せなことはない。そう考えていた。
「これからは地方に眼を向けなさい。地方にチャンスがあるから。今、東京は地方に眼を向け始めている。残念ながら、地方にチャンスがあっても、そ

のチャンスに気づいているところは少ない。地域の人とふれあいながら宝を見つけて温めていくこと、そしてそれを続けること。それが大事なんだよ」

当時、地域について研究をしていた自分にそう教えてくれた恩師からの言葉。それが今でも私の励みになっている。もともと、田舎が好きだった。自然に囲まれて、皆で何かを成し遂げる。そんな瞬間を夢見ていた。夢見ていたが、複雑に入り組んだ現代社会、混沌とした生活の連続のなかで、そんな瞬間を味わうことからずいぶんと遠ざか



暮らしの知恵があってこそこの「島の食卓」。

「茶」といい、島では古くから飲まれてきた。このお茶の商品化に力を注いでいるのが、共同作業所「さくらの家」である。島で親しまれてきた「ふくぎ茶」であるが、お土産用のパッケージが存在していなかったために、なかなか観光客に買ってもらえない状況にあった。それなら、作ろう!! それをできるのが研修生であ



盆踊りの屋台にて。浴衣の3人はインターンシップ生。

る。いろいろなお茶商品のパッケージを見ては「う〜む……」と唸り、さまざまな人に見てもらっては、意見を仰ぐ。

荒削りで走り出したものであっても、反応を聞いては改善する。その繰り返しを行うことによってブラッシュアップは進んでいった。

そうして出来上がった「ふくぎ茶」には多くの人の優しい気持ち注ぎこまれている。冷静に考えてみると小さな一歩かもしれないが、でもそんな一歩を踏み出したことによ

ひまわり長屋の仲間たち。



って、いろいろな仲間が得られ、成功への階段を歩き始めるのかもしれない。日ごろ、一緒に汗水流している仲間、連帯感、達成感を得ている人間同士をつながらから生まれた現実を痛感している。知らないことは聞けばいい、聞いたことは話せばいい、その繰り返しを行うことが大切のように感じている。

海士町では、このほかにも魅力的な商品がたくさんある。そして、どの商品にも共通しているキーワードがある。それは皆、島の人たちがつくっていること。大好きな場所で、大好きな人たちが一所懸命につくったものを味わって欲しい。喜んで欲しい。自然とそんな気持ちが生まれてくる。

「島の食卓」
先生は島のおばちゃん

私は去年、海士町から「NHKきょうの料理大賞」に挑戦していた。島の食を習いながら感じた島の魅力、この島すごいよ、ということを知って欲しい。その一心で挑戦したものであった。

ここでの成果は、料理の先生である島のおばちゃんたちに支えられて表現できたものであった。コンクールが終わって、ふと現実に戻ってみると、島にはもつと魅力的な食事がたくさんある。島で採れた野菜のサラダに魚の塩焼き、海藻の入った味噌汁、島で食べられている普段の何気ない食事。そんな食事の奥深さを感じていた。

その一方で、そんな食事が失われつつある実状。「島での食事について調べてみたい」、そんな衝動から、「島の食卓」プロジェクトが始まった。「煮しめ」を取材してみると、塩漬けして保存している山野草がたくさんあるということ、行事食として欠かせない料理であること、また食事時ばかりでなく、お茶うけにも出していたということ、あまれば刻んで「ませ飯」にしているということ……、一つの料理でもいろいろ魅力が見えてくる。

「高菜と麩の炒め煮」を取材していたとき、「高菜足りないなあ、それなら」しゃんやま、行つて採つてくつわ〜

(海士町では家庭菜園のことを「しゃんやま」と呼んでいます)。言い終わらないうちに、「ほら、高菜!!」。そんな島の人にとつては当たり前のことには衝撃を覚える。

「甘夏の砂糖菓子」「めかぶの三杯酢」「千切り大根とわかめのはりはり漬け」「桜の塩漬け」「イカの一夜干」「カブ菜漬けませ飯」、伝統料理や郷土料理などといった枠組みでは語れない、おばちゃんたちの海士の日常としての多くの料理に出くわすことになった。

そんな取材を続けるうちに、海士の宝物は「海士の日常」だと思ふようになった。そんな日常を掘り起こし、今後も記録を続けていきたい。また、そうして習ったことを皆で一緒に共有できる場を設けたいと考えている。

一人ひとりの利益から
まちづくりは始まる

海士町では日本各地、いや、海外からも多くの人がやってくる。来ていただいたお客さまに、海士の日常を体験

してもらふこと。それが「海士ファン」の獲得へとつながる。交流が行われることよって、まちは刺激を受け、そこから新たなアクションが生まれる。交流がもたらす効果は計り知れない。

そうして来ていただきたいお客さまは、本当に大切な存在だと思ふ。でも、何よりも優先しないといけないことは、地元の人々に喜んでもらうことにあるのではないだろうか。「まちづくりは一人ひとりの小さな利益から始まる」と言われている。ある人にとっては物を売ることであり、またある人にとっては情報獲得であったり、そこに関わる人々が得る小さな利益を積み重ねること。来られたお客さまが喜びを獲得して帰っていく、それと同時に町の人は人が来ることよってそれぞれの利益を獲得する。そうした双方向の利益の獲得がまちの活性化へとつながる。外から人を呼んで来てくれる人、受け入れてくれる人、そしてクツションになる人、私たちインターンである研修生だからこそ、その視点に立った仕組みづ

くりを行わなければならない。

今夏、海士町では、大学生の職場体験である「インターンシップ制度」を実施し、これまで三名の学生が体験を終え、現在、さらに二名の学生が体験中である(九月八日現在)。海士町の夏は一年で最も忙しい季節である。その繁忙期に助っ人として働いてもらい、来た学生にとってはそこから島を体験してもらおうという、いわば双方向の利益の獲得を目指したものであった。

レストラン、ホテル、ビアガーデン、屋台、さまざまな現場で、いろいろな人と一緒に汗水を流す姿。そしてここで輝いている学生を見て、私たち自身が刺激を受けることになった。学生たちは口を揃えて、「島に帰って来ます」と言う。ほんの数週間の期間であるが、一緒に奮闘する時間を共有することによつて、自然と身内意識が生まれていったのである。一人の学生が帰り際に一枚の企画書を持ってきた。企画書には「あまらや設立!! 海士町のアンテナショップつくります」と書いてあつ

た。「帰ってからも海士とつながっていたいから、一人でも多くの人に海士を知ってもらいたいから」。

その言葉を聞いた瞬間、新たな展開、新たなアクションの誕生を予感する。学生たちは島での生活を通して、自ら働きながら海士の商品に触れ、どういう人が、どういう気持ちでつくったものなのか、それをどう表現すべきか、考え、行動していたのだ。そんなつながりを築くことが、交流の最大の魅力なのだと思ふ。

「場」と「場」のつながり、活動源はひまわり長屋

島の北分地区にインターン団地がある。この団地の一区画にある通称「ひまわり長屋」がいまの私の住居である。この長屋には現在、千葉、神奈川、大阪(二名)、スリランカ、大分から計六名のインターン者が生活し、CAS凍結センターや塩事業部、商品開発研修生など、それぞれの場所で働いている。一日の仕事を終え、帰ってくるひま

わり長屋。悩み事を話したり、励ましあったり、一品を持ち寄り食卓を囲みながら、皆で支え合いながら生活している。ここが今の私の大きな活動源になっっている。

「今、ふくぎ茶のパッケージ考えているんだけどさ」「それなら、このPCソフト使ったら?」「今度、梅干しづくりなんだ」「それなら、俺も行くかな」「今度の盆踊り、皆で屋台やってみる?」「海士ノ塩」と混ぜてみようか?」「よし頑張ろう!!」

皆、町のさまざまな場所で働いているので、ここで情報の共有や職場間の連携などが自然と図られている。ひまわり長屋!! 二〇代から三〇代の独身者ならではの愉快な関係が築かれている。この長屋は単身住宅であるがゆえに、いつかは結婚し、いつかは離れてしまうのかもしれない。それでも、この「場」を共有したこと、この「場」で日々を過ごしたことは変わらない。そんな仲間と過ごす時間を大切にしていきたい。

また、北分地区では草刈りなどの清掃活動やソフトボール大会、綱引き大会、運動会、お祭りなどのさまざまな地区活動が行われている。皆と熱くなる「場」があること、地域に愛着を持つ「場」があることによって、多くの議論ができ、つながりが育まれ、そうした状況がイターン者とUターン者、さらには地元の人々との交わりの「場」へと広がっていく。

そして、
これから

海士町は日本海に浮かぶ、人口二五〇〇人あまりの小さな島である。そんな海士町で、私はほんとうに多くの温かい人に恵まれ、皆と一緒に感動的な瞬間を味わうことができていた。確かに悩み、苦しむこともある。でも、ここには悩みを共有できる仲間がいる。悩んでも、苦しんでも、それでもやっぱり、海士が好きということ。何とか未来を切り開いていきたいという気持ちが湧いてくる。

さて、そんな自分にも次の展開が始まりつつある。これからは地方と地方の合わせ技が、新たなアクションを生み出すのではないだろうかと考えている。交流で獲得した外部とのネットワークを活かし、それぞれの人が大好きな場所と大好きな場所を合わせた商品がつかれないだろうか。どこへ行っても海士とのつながりが見えてくる、そんな商品づくりを続けていきたいと思う。これまで海士に訪れた人と、これからもつながりをつけていける仕組みづくりが出来ないだろうか。商品開発研修二年生の秋、そんな夢を追い始める。

後藤隆志 (ごとう たかし)

昭和53年10月12日生まれの28歳。大分県別府市出身。立命館大学大学院社会学研究科前期博士課程修了。在学中には「住民参加のまちづくりゼミ」に所属し、地域の活性化について研究。平成17年5月より、海士町で商品開発研修生として勤務。島の恵みに感謝しながら日々宝探しを行っている。